
スラムダンク 短編集

K C

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スラムダンク 短編集

【Zコード】

Z4555E

【作者名】

KC

【あらすじ】

スラムダンクに関する短編小説を書いていきます。毎回、いろいろな人物が登場します。長くても、3話以内に完結する予定です。どこから読んでも大丈夫です。

悪の道

「君！本当に足を直したいのかね？」

鋭い口調で怒っているのは、医者の村田だ。口にひげを生やして、体格もいい。

「はい、もちろんです」

そう言い返すのは、高校1年の三井寿だ。練習中に突然、左足のすねのあたりを痛めてしまった。

直接の原因は分からないが、検査の結果、長年の蓄積の疲労だと考えられた。

ケガをしたとき、あまりの激痛に大声を上げた。体育館中に響きわたり、すぐに救急車を呼んだ。

そのときの診断では、1ヶ月の入院。その後、約2ヶ月の安静が必要であった。

「だつたら、どうして安静にしないんだ？」

村田は、三井を見て言った。すぐに三井は言葉を返した。

「夏の大会に間に合わないからです」

一瞬の沈黙のあと、村田は言った。

「君ね、気持ちは分かるけど、今は治療に専念しないと。そうしないと、直るものも直らないよ」

「それは分かってます。しかし、時間がないんです。足の痛みはもうないし、大丈夫です」

三井は、はっきりと言い切った。

「そうかもしれないけど、まだ完全には直っていないんだよ。もう少

しの辛抱だからさ」

「いえ、もう大丈夫です。これ以上、チームに迷惑をかけられません」

村田は腕を組んだ。とても困っているようだった。

三井としては、これ以上待てなかつた。4月にケガをしてから、すでに2ヶ月以上経つていた。

試合は7月の初めに組まれている。診断どおりに安静をしていると、予選が始まってしまう。

予選が始まる前までに、絶対に間に合わせたかつた。

「じゃあ、練習があるので、失礼します」

「おい、ちょっと待て」

村田は呼び止めた。これまでなく、厳しい表情をしている。

「君は以前にも抜け出したことがある。そのときも、痛みが再発して戻ってきたよな？」

三井は痛いところをつかれた。入院中に病院を抜け出し、練習に参加したのだ。

そのときも、足を痛め病院に戻されていた。

「はい。でも、もう大丈夫です！あれから、1ヶ月たつてるし」

その後は、反省をした。抜け出すこともなくなり、おとなしくしていた。

もう松葉杖なしでも、歩いている。ただし、バスケはやるなど言われていた。

しかし、体がうずうずしているせいか、練習にも参加していた。

「また同じことになるわ。今度は、もっと大変なことになるかもしない」

今まで以上に、強い口調で言った。顔が本気になつていてる。

「大丈夫です。今度は気をつけますよ。少しでも痛みを感じたら・・・」

「それじゃあ、遅い。もつ少しの辛抱だ」

「大丈夫です。練習も軽めにしますから」

「いいかげんにしろ！」

大きな怒鳴り声が響いた。三井は、その声にビビってしまった。

「これ以上、無理をするとバスケができなくなる」

そう言わると、三井は固まつてしまつた。村田は続けて言った。

「いや、もうバスケは無理かもしれないね」

その言葉を聞いて、三井は完全に固まつた。

「今日の診察は、これで終わり。帰つていいですよ」
三井は走り去つてしまつた。

「先生、言い過ぎたんじゃありませんか？」

「うん、ちょっとやりすぎたな」

看護婦の中村と村田が話していた。

「たしかに三井君は生意氣でした。言つこと聞かないし、手のかかる子だと。だけど、バスケができないは言つすぎですよ。ちょっとかわいそつ」

「そうだな。熱くなりすぎた。次に来た時は、もうこいつって言つつもりだつたのになあ」

村田は後悔をしていた。果たして、次は来てくれるのか?そんなことを考えていた。

「バスケができねえって、なんだ、あの医者」

三井は一人で公園にいた。

「普通に歩けるし、痛くねえ」

しかし、足の動きは、いつもと違う。やはり違和感を感じていたようだ。

その後、三井は悪の道に足を踏み入れてしまったのだ。

悪の道（後書き）

どうだったでしょうか？

堀田たちの不良グループに入るとこひは、書きませんでした。

この部分は、自分も含めて、想像でいいです。

自分の中では、ケンカに巻き込まれたところを助けられたのがきっかけだったのだろうって思っています。

軍団の結成！？

豊玉戦を僅差で勝ち取った湘北は、旅館に戻っていた。

それを見送る赤木晴子や湘北高校を応援していたメンバー。「明日もがんばれよ。期待してるぞ」

「おう。任せとけ、洋平」

桜木が身を乗り出して、手を振っていた。

「落ちるぞ、桜木」

「落とせ、落とせ」

緊張が取れたのか、湘北のメンバーは冗談を言っていた。

「三つちゃん。今日もよかつたよ」

「おい、気持ちワリーぞ」

堀田軍団は、炎の男・三井寿の旗を振りながら見送っていた。

「じゃあ、私たちは少し広島市内を観光してから、藤井ちゃん家に行くね」

「うん、じゃあ、また明日会おう」

晴子は藤井と松井の3人で行ってしまった。3人は藤井さんの親戚の家に泊まるのだ。

残つたのは、桜木軍団と堀田軍団。周りから見れば怖い集団だ。

「行つちゃつたね。ハルコちゃん」

高富が寂しそうに言った。そう彼らには・・・

「今日は、どこに泊まるんだ？」

となりにいた大楠が言った。

「すぐ近くの旅館にするか？」

野間も、すぐに反応する。

「いや、そうしたいところだけど・・・」

彼らはポケットからお金を出して数えていた。しかし、彼らの所持金は千円にも満たなかつた。

そう彼らは、旅館に泊まるお金を持つていなかつたのだ！

「新幹線なんかに乗らなければよかつた」

大楠が後悔していた。

「何言つてんだ。乗らなければ試合に間に合わなかつたんだぞ」

洋平がすかさず反論する。

「もう少し早く出ればよかつたんじゃないか？」

「そうだよな」

「いや、そうじゃない？理由は別にある」

洋平が真剣に言つた。

「駅に着くまでに時間がかかりすぎたんだ。あいつのせいで・・・」

3人は一斉に指で原因のある人物をさした。

「高富、お前が重すぎるから、スピードが出ないんだぞ」

「えつ、俺のせい？」

「だいたいお前1人で、2人分だからな。だから、スピードが出ないんだ」

「そんなこと言われても」

桜木軍団は、いつものように下らない争いをしていた。

「何をもめてるんだ、桜木軍団。スクーターに4人乗りとは、立派な違反だぞ」

「堀田さんに言われてたくないぞ。アンタラだつて、ビうやつて來たんだ？」

洋平が聞き返した。たしかに、気になる話である。

「俺らは交通費に金をかけてない」

「といつと・・・」

「俺らはヒックハイクでやつてきたんだ、猿垣石のよつこな。ハハハハー！」

堀田は大声で笑っていた。

「どうせ、ひ弱そつな運転手を捕まえて、ムリヤリ乗つたんだろう

よ

「その光景が浮かんでくるよ

桜木軍団は、あきれっていた。

「じゃあな、桜木軍団。俺らは、これから宿を探すんだからな

「おい、あんまりムチャなことしないでくださいよ

「分かってるよ、そのくらい。せいぜい頑張れ、水戸」

そう言つて、堀田軍団は、どこかへ言つてしまつた。

「仕方ないな。俺らは、どこかで野宿するしかないな

桜木軍団も、体育館をあとにした。

「徳ちゃん、これからどうします？」

「俺らは交通費が浮いたからな。その分で、どこかへ泊まるぞ」

堀田軍団は交通費で浮いた分を、宿泊費に当てるつもりらしい。

「おい、そこのリーゼント待てよ！」

「なんだと、誰に口を利いてるんだ」

堀田軍団は、一斉に振り返つた。

「なつ

「さつきの試合では、どうも

そこには、豊玉の応援団がいた。人数は5人で、かなりガラが悪い集団だ。

「なんだお前ら。何のよつだ？」

「言いつつも、かなりびびつていた。

「お前らの応援のせいで、うちらの学校が負けたじゃないか」「逆恨みか。正々堂々とやつたじゃないか？むしろ、そつちが汚いファールしてたじやねーか」

湘北vs豊玉は、かなり荒れた試合になつた。南のヒジ打ちによる流川の負傷、赤木への徹底したマーク、相手への中傷を含むヤジ。

これによつ、豊玉高校および湘北高校は、審判に警告を受けていた。

「お前らのせいで、俺らは帰らなくちゃいけなくなつたんだぞ」

「決勝まで残るつもりだったのによ」

「何を言つてるんだ、お前ら。どーセ、勝つても次は山王戦だつたんだ。豊玉じや勝てねーよ！」

「なんだと、コラア。ぶつ殺すぞ」

豊玉の応援団がヒートアップしてきた。

「徳ちゃん、ヤバイよ。逃げよう」

「さすがに引き下がれねえよ。やつちまえ」

ドン。不意突かれ、後ろから尻のあたりを蹴られた。

「いてえーな、何すんだ？あつ・・・」

後ろにも豊玉の応援団がいた。しかも、8人である。

「ヤバイよ、徳ちゃん」

堀田軍団は、13人に囲まれてしまつた。逃げるにも逃げられない状況になつた。

「くそ、どうしたらいいんだ？」

そんなことを考へていると、救世主が現れた。

「おい、そんな人数でケンカするなんて、ずるいな」

聞き覚えのある声がした。あの桜木軍団が仮面を被つてゐる。

「その声は。さくらぎ・・・」「

「あつ、徳ちゃん、それは言っちゃダメ！」

慌てて水戸が口を塞いだ。インターハイ選手の桜木の名前を出すのは、まずいからだ。

「じゃあ、水戸洋平、その他・・・」

「誰がその他だ！」

「俺らにも名前があるんだぞ！」

「いい加減、名前覚えてくれ！」

堀田は水戸以外の3人の名前を覚えていなかつた。

その他と言われた3人は体育館で起きた事件ときのように反発した。

「これで覚えろよ、高宮望」

「大楠雄一」

「野間忠一郎」

「あの伝説の和光中の3バカトリオとは、こいつらのことだ」

「なんだと洋平。この間のテストは、俺らといい勝負だつたぞ！」

そして、お決まりのフレーズで洋平が締めた。

「なんだ、このフザケた連中は？」

「アンタらに言われたかねーよ。大人数で卑怯だ」

桜木軍団は戦闘の準備を整えていた。

「やつちまえ」

豊玉の応援隊は、戦闘態勢に入った。

「徳ちゃん、行くぞ」

「おーっ」

湘北の応援隊も、戦闘に突入した。そして、結果は・・・

「たいしたことなかつたな」

水戸が親玉を倒した。今回は、まともに攻撃を受けなかつた。

「私立のお坊ちゃんまだつたんだな、こいつら。ちつ」

「でも、そいつらにビビッてたのは、誰だっけ？」
大楠がバカにするように言つた。

「なんだと」

「まーまー」

高富がニヤつと笑つた。

「最後は宿泊のチケットもくれたしな」

「これで、決勝まで安心して暮らせるぜ」

「よつしゃー、行くぞ」

桜木軍団と堀田軍団は一致団結をし、豊玉の応援隊を倒した。
さらに決勝までの宿泊場所も確保した。

“湘北バスケ部、全国制覇に向けて、頑張ってくれよ”

軍団の結成ーー? (後書き)

豊玉戦後の桜木軍団と堀田軍団の様子を書きました。

特に旅館に泊まっている描写もないのに、どうしたのか気になりました。

アニメでは、広島までの電車賃を海の家でアルバイトをして稼いでいます。

卒業後の進路

赤木剛憲は、大学から送られてきた封筒を開けた。

中身は大学の合否についてである。もう一つの時点で、なんとなく分かつていたが・・・

「また、不合格か」

不合格と書かれていた紙を右手で握った。これで4校目だった。

— 進路相談室 —

「お願いします」

赤木は、先生に深々と頭を下げていた。

「いやー、参ったね。まさか赤木君に限って、こんなことが起きるなんて」

先生も驚いていた。なぜなら、赤木は学業でもトップクラスの成績だつたからだ。

「気持ちは分かるが、今から就職は厳しいよ

「分かつてます」

「来年、もう1回受験を考えたら、どうだ?」

「いや、それは・・・」

「おい、赤木」

いきなり入ってきたのは、木暮と三井だった。

「急に入つてくるなんて、失礼だぞ!」

「すいません」

木暮と三井は平謝りをした。心配そうな表情をしている。

「赤木、そんな思いつめるなよ」

「お前らしくないぞ」

「そんなこと分かつてる」

赤木は暗い表情のままだった。もうあとがない状況だった。

「まだ第一志望の発表があるんだからさ」

木暮は赤木を励まそうと必死だった。しかし、三井は・・・

「ダメだつたら、来年、また受ければ・・・」

「なーに、言つてんだ、三井。もしかしたら、お前の後輩になるかもしれないんだぞ！」

「あつ、なんだと！」

「おいおい、こんなどこで、よせよ」

励ますために來たが、やはり火に油を注いでしまったようだ。

「おい、赤木」

そこには、大きな男が立っていた。

「何の用だ！？・・・青田」

「バスケ部の元キヤプテンがいまだに進路未決定だと・・・それじゃあ、全国制覇は無理だな」

「そういう柔道部は、どうなんだ？」

「俺、一人だ！」

「お願ひします」

青田は、先生に土下座をしていた。

「ハハハハ！」

三井は大爆笑していた。

『何であいつは、昔からあんなバカなんだ』

赤木と木暮は呆れていた。

「そーいや、三井は大学決まつたのか？」

「あー、推薦で決まつたって言つてた」

赤木と木暮は、喫茶店にいた。

「三井の奴、冬の大会で頑張つてたからな」

木暮は冬の大会を思い出していた。三井は、かなり活躍した。

「まつ、あいつと俺は関係ない」

「そう言うなつて、赤木」

赤木はため息をついていた。飲みかけの「コーヒー」を飲んだ。

「大丈夫、きっと合格してゐる」

「木暮ー、お前はもう合格してるから余裕なんだろうけど・・・」

「わつ、そんな身を乗り出すなつて」

赤木は興奮していた。

「もし、お前が落ちてたら、俺もいつしょに、もう一年頑張るよ」「何言つてんだ。そんな同情はいらな」

「お前がいないと勝てないんだ。赤木ー今後こそ、全国制覇するんだからな」

赤木は、木暮の発言にびっくりしていた。

「そして、あいつもいないとな」

「今、なんて」

「いや、なんでもない」

- 赤木家 -

「おにいちゃん、お帰り」

「ただいま」

家に帰ると、妹の晴子が出迎えていた。

「おにいちゃん、封筒が届いているわよ」

晴子から手渡されたのは、なんと第一志望の大学からの封筒だ。すぐに開けたい。しかし、結果を知るのは怖い。封筒の厚さは微妙だった。

「晴子、お前が空けろ」

「何言つてんの、おにいちゃん」

赤木はソワソワしていた。試合中にも見せないほど、弱気になつた。

「そんなこと言われても・・・」

「いいから、空けてくれ」

「分かったわよ」

晴子は、しぶしぶ封筒の中身を空けることにした。

ビリッ、ビリッ。カサッ。封筒から紙が出てきた

赤木の心臓は、バクバクしていた。こんなに緊張したのは試合でもない。

「やつたあー、合格よ」

「えつ！？」

「合格よ。お兄ちゃん」

晴子は喜んでいた。赤木はまだ実感が湧かなかつた。

「ふうーと、ひとつ息をついた。そして・・・

「やつたー、ウホー」

となり近所に響くような大声をあげて喜んだ。

「おー、タケーつねせいだ」

「赤木、受かつてたんだって。おめでとう」

「そう言つ木暮は、どうだつたんだ？」

「俺も合格だ。また、同じ大学でがんばろうな」

そう言つて、木暮は右手を出した。赤木もガツチリと握手を交わした。

「おい、赤木。その調子だと、大学が決まつたのか？」

三井が後ろの扉から入つてきた。

「まあな」

「これで、また3人同じチームでやれるな」

「えつ！？」

赤木と三井は驚いていた。

「言わなかつたけど、三井の推薦が決まつた大学。俺らの第一志望だつたんだよ」

「なんだつてー」

「おい、どういうことだ、木暮」

赤木は木暮の襟を掴んだ。

「いいじやないか。また、同じチームでやれるんだから」

三井が推薦をもらつた大学は、偶然にも、赤木と木暮の第一志望と同じ大学だつたのだ。

「ちえつ。また、赤木と同じか」

「なんか文句あるのか、三井」

「いや・・・今度こそ、全国制覇するぞ。赤木！」

「ふつ、もう逃げ出すなよ」

「何言つてんだ！」

バチン。二人は両手を合わせた。

「よーし、これで全国制覇へ一歩近づいたぞ。もう4年間、がんばるやー！」

3人は、全国制覇に向けて、新しい1歩を踏み出した。

卒業後の進路（後書き）

今回は、ゴリにスポットを当てて書きました。

あれから10日後で、ゴリは受験のためにバスケを封印。

しかし、晴子の口から成績が落ちたことが明らかになつてます。
逆にメガネ君は、OBとして、よく顔を出している設定になつてます。

一人残つたミツチーは、大学推薦を取るために頑張っています。
きっと続きがあつたとしたら、同じ大学だと思います。

敵同士になるのは考えにくいし。

3人は、大学でも全国制覇に向けて、努力していくんでしょうね！

リハビリ王

「桜木君、今日もキツイわよ」

「ハハハッ！この天才に耐えられないものはない」

こうして、今日もリハビリが始まった。

山王戦で腰を強打した桜木花道。

その後も無理して試合に出場したせいで悪化していた。
どうやら脊椎というところを損傷してしまったらしい。

普通なら歩けなくなっているが、奇跡的にも歩けてはいた。

しかし、数十分ほど歩くと立つのが辛くなつてくる。
座りたくないが座つてしまふ。ジャンプをするのは厳しい状態だ。
ジャンプ力がすば抜けていた桜木にとっては非常に痛かつた。

ただし、リハビリをすれば、なんとかなるとのこと。
とりあえず、2学期の間は休学し、リハビリに専念することになつた。

「ふー、今日も終わった」

桜木はタオルで汗を拭いていた。鏡を見ている。ふと頭を触つた。
「髪が伸びたな」

トントン。ノックの音で扉を見た。

「今日もがんばったじゃない？」

リハビリ担当の看護士が部屋に入ってきた。

「ハハハッハ！天才ですか？」

「なーによ、それ！まつ、たしかに天才かもね」

「やつですよ。全国は通過点。世界をめざしてるんですから」

看護士はカルテを見ながらボールペンでチェックをした。

「このペースだと、あと1ヶ月くらいで学校に行けるわ」

「本当? おばちゃん」

「うん、あなたの回復力はすごいわ。電車で例えるなら、普通の人は各駅停車。でも、桜木君は新幹線かな」

「そりや、もちろん。天才ですから。リハビリ王・桜木に任せてくれださい」

右腕で胸をポンと叩いた。

「また、出たわね、天才。桜木君の口癖ね!」

「おーい、花道」
「ぬつ、その声は?」
桜木は扉の方を見た。見覚えのある4人が立っていた。

「よつ、元気にしてるか。リハビリ王」

「おつ、洋平」

そこには桜木軍団がいた。今日は休日なので私服だった。

「元気にしてるか、花道」

大楠は手をあげて軽くあいさつをした。

「当たり前よ。リハビリ王だからな」

「桜木君、お友達?」

「まあ」

「花道がいないと面白くないや。何にも起きないからな」
高富がコーラを飲んでいた。相変わらず、太つてる。いや、また太

つたか?

「中間テストも終わつたぞ」

洋平が言つた。バッグからプリントを出し、花道に渡した。

「今日は俺の勝ちだったな。赤点3つ！」

野間が得意そうに言った。相変わらず、おじさんっぽかつた。

ま、備は2つた、たがりな

卷之三

「ふつ、おめーら、相変わらずバカだな。今回ばゼロだぞ」

—あたりめーだ、受けないんだから。本当だつたら、赤点王だぞ、

高麗文書卷之三

「なーにー、おめーら」

「アハハ、仲がいいのねえ

「みんな! いなこです! ゆー

木は手を握ってアヒルした

「 横木君 いつ もより 元気よ とにかくで 看たぢ いじは 着くあで どのくらい かかつた？」

卷之三

洋平が答えた。やはり、こうして

「けつこつ遠こでしむ。変なといひがたひめのかいか。よく来たわね」
淳平が答えた。やはり、この子は、一 番おとなしくしていい。

「まつ、花道が『ん』でいるたるうから」「なんだと」

「ところで花道。ちゃんとリハビリやつてゐるのか?」

洋平が一番気になつてゐることを聞いた。

「あたりめーよ。リハビリ王だからな」

「バスケでは、基礎練やつてなかつたのにか?」

「すかさず高富が突つこむ!」

「今は基礎を大事にしてるぞ。『口に教わつたからな。なー、おばちゃん』

桜木はおばちゃんの方を向いた。

「本当、桜木君はすごいのよ。リハビリ王かもね」

「はつはつはつ!世界を目指しているリハビリ王だからな」

そんな感じで楽しく会話をした。

「じゃあ、またな。花道」

そう言って、4人は帰つていった。

「花道、元気そだつたな」

そういうのは大楠。田舎の舗装されてない道を歩いていた。

「相変わらずだつたな」

「本当だよな」

「だけど・・・」

水戸が深刻そうな顔で言つた。

「バスケできないかもつて言つてたよな」

帰り際、看護士のおばちゃんが言つていたことを思い出していた。

「桜木君は必死で頑張つてゐるよ。本当だつたら、歩けない可能性もあつたのに。今では立てるよつになつたわ。だけど、これからバスケを続けられる保障はないわ。それも彼に言つたけどね。でも、『絶対にやつてみせる、天才ですから』って言つてね。単純なのか、バカなのか。それとも信じたくないのかな。とにかく諦めが悪い子

がなんだよね

「やつぱ、無理なのかなあ・・・」

「いや、花道は不死身だから大丈夫」

「だったら、いいけどな」

4人は夕日を見ながら帰宅した。

「くつ、やつてやる。諦めたら、そこで試合は終了なんだ」
そう言いながら花道は一人で孤独にリハビリをしていた。
湘北バスケ部で学んだ精神で一生懸命取り組んでいた。
週1回の晴子さんの手紙が今の楽しみだった。

リハビリ王（後書き）

主人公・桜木花道にスポットを当ててみました。
リハビリをしている花道。
きっと、こんな感じでがんばっているんだろうと思いません。

バスケシューズ？

「ねえ、店長！売つてくれよ。10万出すからや」

帽子をかぶつた男は、財布からお金を出した。

「ダメつたら、ダメ！前にも言つたけど、履かない人には売らないんだ」

髭を生やした店長は、シューズの手入れをしながら言つた。

「これだけなんだよ。これを手に入れば・・・」

「ダメなものは、ダメ。履かないんだつたら、靴も悲しむ」

「ちえつ。分かつたよ」

男はシューズをじつと見てから、背中を向けた。

「今度は、20万持つてくれるよ」

そう言つと、男は店を出た。

「ふーっ」

店長はため息をした。どうして、履かないのに集めるんだろう？
靴は履くもの。集めたりするものじゃない。
飾られてるだけじゃ靴だつて悲しむのに。

「ほら、お兄ちゃん。この店よ」

店長はドキッとした。この声は聞いたことある。しかも、お兄ちゃんつて・・・

「いらっしゃいませー」

店長はドキドキしながら、声の方を見た。

そこには、あのショートの女の子とものすじへ背の高いゴシイ男が立っていた。

「あ、店長、こんちは」

「やあ、晴子ちゃん、こんちは」

赤木晴子。今は湘北バスケ部のマネージャーをしている1年生だ。手を振つてあいさつをした。ここに来るのは、3回目になる。

背の高い方の男は驚いていた。なぜなら・・・

1年くらい前に顔をつかんだ人物が目の前にいるのだから。

「おい、晴子。どういうことだ？」

湘北高校バスケの元キヤブテンである赤木剛憲は落ち着かなかつた。

「あら、言わなかつたつけ？ こここの店長さん、とても親切なよ」

「やあ、赤木君」

赤木は店長を見た。

「どうして、俺の名前を？」

「いやー、実はね・・・」

「そうだつたんですね」

「そうなのよ。お兄ちゃん、バスケをやつてたんだつて」

「いやー、あのときはすまなかつたね。赤木君」

そう言つうと、店長は平謝りをした。

「いえ、こちらこそ、失礼しました」

赤木も頭を下げた。

「でも、君が全国大会に出るなんて思わなかつたよ。山王との試合最高だつたよ」

「ありがとう」
「ざいます」

「今はどつしてゐのかね？」

「大学受験に向けて、受験勉強しています」

「そなのが。バスケやりたくて、ウズウズしてゐんじゃないか？」

赤木は痛いところをつかれ、ビクッとした。

「せつなんですよ。お兄ちゃん、無理しないで来ればいいのに。木暮先輩と

暮矢畫

「あいつと俺は違うんだ。もう引退したんだから」「

無理しなくていいのに！」

「ハハハ。晴子ちゃんは？」

「あたしはバスケ部のマネージャーになつたんですよ」「えつ、ううなの。じゃあ、また全国を目指すんだね」

「もせんてす」

「でも、全国2位の海南、それと陵南も強いよ。あと、翔陽も全員

死せるからね

「あー、ちやんと雑誌も見せてね。まあ、これ

雑誌を見ると「混戦・激戦区 神奈川」という記事が載っていた。

「二〇一七年、海南が優勝しているからね。だけど、そろそろ変わ

「だんだんと懶りだ

なせかと思ひてゐたが、

「海南も今年の牧みたいに毎年優秀なプレーヤーを出した。そして、

絶対王者ではなくなったと思うんだ。それに翔陽だつて黙っちゃいなーはずだー

店長は続けた。

「冬のセンバツは混戦になるとと思つよ。湘北は赤木君が抜けたけど、

勝機はある。それに・・・

「ねえ、お兄ちゃん。どの靴にする?」

「いや、今はいろいろなんだが・・・」

やつぱり聞いてない。この子は、人の話を聞けないな。

「そういえば、桜木君は元気にしてるかな?」

「えつ、はい。まだリハビリ中ですが・・・」

「そうなのか。じゃあ

店長は店の奥から靴を出した。

「この赤と白の靴は、どうかな?」

「いえ、今日は・・・」

「いやー、赤木君じゃないよ。君に渡すと、受験勉強ほつたらかして、バスケしそうだからさ。ハハハ」

「じゃあ、誰に?」

「桜木君だよ。彼にあげて欲しいんだ」

「この靴も僕には大きすぎるんだ」

「そうね、今度、お見舞いに行つたときにも渡そつかな」

「じゃあ、決まりだね」

「おい、晴子。お金は?」

「いいよー、お金は。全国祝いでタダ」

「いえ、そんなわけには・・・」

さすがに赤木もこれにはちよつと申し訳なく思つた。

「いや、いいよ。それに前のこともあるし」

「じゃあ、店長。これでいいですか?」

そう言って、赤木は千円札を出した。

店長を千円札を見つめていた。

「店長、ありがとうございました。また来ます」

「ありがとうございました。またお越し下さいませ」
2人は帰つていつた。それにしても・・・まったく似てない。
まつ、いいか。この冬は面白くなりそうだ。

店長はこれから始まる戦いの想像をするだけでワクワクしていた。

「おい、晴子」

「なーに、お兄ちゃん」

「桜木とあの店に行つたのか？」

「うん、前にな。あの店長さん、ものすゞくサービスがいいのよ」

「そりが」

桜木のやつ。許さんぞ！ いつのまに晴子と。

「へーっ クション。あー」

鼻がムズムズする。また誰か、この天才の噂をしてるな。

バスケシューズ？（後書き）

晴子は2回目に桜木と来た時に「おにいちゃんにも紹介します」と
言っています。

というわけで、書いてみました。

料理人 v/s 受験生

「ガラガラガラ！」

「いらっしゃいませ」

料理人はせつせつと準備をしていた。

「おい、魚住」

その声に気づき、料理人は客を見た。

「赤木。それと木暮じゃないか」

「よつ、魚住。久しぶりだな」

「すまん、まだ始めたばかりでな」

そう言いつつ、魚住はテキパキと仕事をこなしていた。

「おい、魚住」

「なんだ、赤木」

「夏の試合では助かつたよ」

赤木は山王戦を振り返るよつて言つた。

「ああ、水差しして悪かつた」

魚住はペコリと頭を下げた。

「そんなことないぜ、あれで湘北は救われたんだぞ」

木暮は感謝していた。なぜなら、赤木が完全に押さえ込まれ、敗戦濃厚だつたからだ。

山王戦では、かつてないほど大黒柱の赤木が押さえ込まれていた。

赤木はチームよりも相手のセンターである河田との勝負に力を注いでしまつた。

日本一のセンターである河田にどこまで勝負できるか？
さらに日本一の大学である深体大に誘われ、プレッシャーになつて
いた。

「赤木よ。俺は最後までお前に勝てなかつた」
魚住も高校生活を振り返つていた。苦しかつた練習・・・自然と涙
がこぼれた。

「おいおい、何感極まつてるんだよ。もつと、楽しい話でもしよう
ぜー！」

「いつも店番してるとか？」

「ああ、学校が終わつたあとはな

魚住は包丁を動かしながら答えた。

「二人は、どうなんだ？」

「俺たちは受験勉強だよ」

「ほつ

続けて木暮が答える。

「そして、大学で全国制覇をするつもりだ。なー、赤木

「ああ、そうとも」

「そうか、お前ら、まだ全国目指すのか？」

「当たり前さ。魚住がいなのは残念だけどな

木暮がせびしそうに言つた。

「最近の湘北は、どうなんだ？」

「ときどき見に行つてるけど、今度の冬は・・・」

「よせ、敵に情報をあげるな

赤木は木暮の口を塞いだ。

「いいじゃないか、もう引退しているんだし

「別に大丈夫だ。どーせ、彦一のやつも調べているだろ? つかうぞ」

「あつ、たしかに」

2人は彦一の顔を浮かべた。

「でも、赤木は最近の様子分からぬだろ。バスケ部に顔だしてないんだから」

「ほう、そうなのか」

「赤木も来ればいいのにさ。赤木つたら、バスケやりたくなるから我慢してんんだぜ!」

木暮は赤木をつづいた。

「ええい、木暮。余計なことは言わなくていい」

「うわつ、やめろつて」

「ハハハ。赤木らしいな」

魚住は笑っていた。

「やはり、赤木はバスケがないと生きていけないんだな」

「そういう魚住は、どうなんだ?」

赤木の問いに対し、魚住は答えた。

「俺はだな(まさか仙道が練習では、まとめられないの、わりと見てるとは言えない)」

「黙つているということは、やつぱり見に行つてるな」

赤木が突つこんだ。

「つるさい。赤木には関係ない。それに俺は板前のこと(頭がい)ぱいだ」

「でもさー、魚住。バスケシューズを履いてるのは、なぜだ?」

木暮が突つこんだ。

「いや、それは……」

「ハハハ。仙道はキャプテンらしくないか」

「まったく信じられん」

「まあ、仙道らしいよな」

「俺は安心して引退したはずなのに・・・トホホ」

「まつ、いいじゃないか。たまには息抜きも必要つて」とセ

「何言つてんだ。全然息抜きのレベルじゃないんだぞー。」

魚住は身を乗り出した。

「わつ、興奮しそうだつて」

「もうすぐ冬のセンバツも始まるしな。また湘北が勝たせてもらつぞ」

赤木は宣戦布告といえるような発言を魚住に浴びせた。

「その言葉は訂正させてもいい。今度こそ、陵南が全国だ。なぜなら、仙道がいるからだ。あいつなり、きっとなんとかする」

「でも、練習は上手くまとめてないんだー。」

赤木が突つこんだ。

「つるさい、あいつは試合では違うんだ。何度、試合の中であいつに救われたか?」

「たしかに、そうだったな。あいつに何度もやられたことか」

「そーいや、桜木のやつは、どつなんだ?」

魚住も気になっていた。

「そつか、桜木も不死身じゃなかつたんだな」

「ああ、そなんだ。でも、復帰したら“湘北の切り札”になる」

木暮は答えた。

「でも、切り札とか言つて、うちとの練習試合では温存されてたな

「あのときの桜木とは、別人で・・・」

「分かつてゐよ。あいつは勝負したくなるんだ」

魚住が桜木との対決を振り返っていた。

くそ生意氣な1年。でも、あいつのせいでファウルを取られた。それにリバウンドでは、赤木以外で初めてあんなに取られたことを思い出した。

「じゃあ、そろそろ俺たち帰るわ」

「そうか、じゃあ、最後に一言言わせてくれ」

2人は立ち止まつた。

「陵南は2度も湘北に負けないはずだ」

「また生意氣言つて」

「でも、赤木。俺はお前に負けたことを認める。だからと言つて、チームの負けは認めたくないんだ」

魚住は堂々と言ひ放つた。

「魚住。お前は全国でも通用するセンターだつた。豊玉のセンターより数倍強かつたぜ！」

赤木はそう言い残して店を出た。相手を褒めることが苦手な赤木にしては珍しい一言だつた。

「魚住、また決勝リーグの舞台でな」

そつ言つて、木暮も店を後にした。

「ありがとうございました」

赤木。お前に負けても、チームは負けない。

そう思いながら、魚住は板前の仕事をこなしていた。

それに最大のライバルから褒められたことを嬉しく思っていた。

料理人 v/s 受験生（後書き）

魚住と赤木はチームの大黒柱。同じポジションでもあり、キャプテンという立場で最大のライバル。しかし、2人の選んだ道が違うと いうところを書いてみました。だけど、やっぱり引退しても、バス ケ好きというところは変わらないのです。

チビだつてできる

「くそ、あいつだけは止められねえな。ちくしょーーー！」
体育館の電光掲示板には、50・49と表示されていた。
残り時間も少ない。しかし、ひとりの男によつて、チームは追いつこうとしていた。

「おい、お前ら何やつてんだ！」

監督のゲキが飛んだ。フリースローを含み、20点目を入れられた。

「いいぞ、リヨータ。まだいける！」

ベンチにいる“ヤス”こと安田が頑張つて声を出していた。

「おおつ、まだいけるぜ」

富城リヨータはベンチにいるヤスに答えた。

「くそつ」

監督は拳をにぎり、イスから立ち上がった。

「お前ら、とにかく抜かれるな」

「分かつてますよ、監督」

すると、キャプテンの指示で“ダブルマーク”になつた。

「あつ、2人がかり」

しかし、富城は落ち着いていた。こうなることは予想できていた。
味方が奪つたボールが、富城のもとへ。

相手が抜かれないように警戒していたところで、フリーの味方にパスを出す。

「やべ、フリーのやつにパスが通つちまつた

「よし、打て」

味方のメンバーは、ショートを打つが・・・
ガツン。ボールはリングに跳ね返された。

「ふつ、助かつたぜ」

「リバウンドー」

取りに行こうとするが、やはりティフェンスの方が有利。
相手にリバウンドを奪われてしまった。残り時間は、1分を切つた。
1点リードを許している場面で、相手にボールが渡つてしまつた。

「ちくしょーっ」

チームは絶望的だつた。もはや、宮城リヨータに頼るしかない。
なんとか首の皮1枚つながつていてるところだ。

しかし、上背のない宮城はリバウンドを取るのが難しい。
こればかりは味方に頼るしかないのだ。

「ここは絶対に止める」

ベンチの安田も必死の声援だ。声がつぶれてもいいくらいの気持ち
だつた。

「宮城リヨータ。上背はないが、こいつのスピードは抜群だ」

「一トサイドで田岡の田が光つた。しかし、一抹の不安がよぎる。

「安西先生、横取りしないでくださいよ」

となりに座つていた安西に忠告した。去年はMVPシユーターニ井
を取られた。

「ウチは公立ですから」

安西はお茶をすすりながら、マイペースに答えた。

「よし、とどめだ」

横田中のキャプテンがショートを放った。

しかし、誰が見ても明らかに入りそうにないショートだった。

「リバウンドー」

選手たちは、みんなリバウンドの体制に入る。

しかし、相手にいいポジションを取られた。

『くそっ、このままだと相手に取られる』

『よし、相手に取られなければいい』

ショートは予想通り外れた。そして、肝心のリバウンドは・・・
バシッ、横田中のセンターが取つた。

「ふつ、やつたぜ」

相手もしてやつたりの表情だ。ほとんどの人が“やつてしまつた”
と思っていた。

だが、一人だけ、その瞬間を狙っている人物がいた。

「したあああ

宮城はその瞬間を狙っていた。消極的だが、相手の取つたボールを
弾く準備をしていた。

下からボールをたたき、相手の手からボールがこぼれた。

「くそっ、最後までちょこまかと」

ボールは誰もいない方へ飛んでいった。

『やべつ、誰もいねえ。このままだと相手ボールだ』

宮城は直感的にボールの方へ向かつた。ボールはコートを出た。

「どけええ

宮城は田園や安西のいる席に突つこんだ。

ガタガタガター

ボールはなんとか「コード」に戻り、味方が取つた。
机とイスは、ぐちゃぐちゃになつていた。ボールも味方が取つた。

宮城は心中でひとまず安心していた。

『よし、これでうちの最後の攻撃だ』

ピピッ

「ボールが出たあと、横田中ボール」

無常にも審判の笛が鳴つた。審判も必死の形相だった。

「くそおつ。なんでだよ」

「君、手上げて。言葉が乱暴だ」

宮城は立膝をつけ、コードを見つめた。

『もう勝てない』「今までなんとかくらいついてきたが、ついに勝ちを諦めた。

「まだ諦めちゃいけない」

そこに安西が立っていた。

『希望を持つんだ。諦めたら、もう試合終つだよ』

宮城はその言葉を聞いて、冷静さを取り戻した。

『そうだ。まだ終わっちゃいないんだ』
手をあげ、審判に軽く頭を下げた。

「おい、まだ終わつてないぞ」

宮城は大きな声を出した。味方も気づき、最後まで粘りついた。

「よし、もう攻撃するな。ボールを回せ」

相手監督の指示が飛ぶ。相手も取られないようにパスを回し始めた。なかなかボールが取れない。が、残り10秒でチャンス到来！

パシッ

「でかした、田村」

相手のパスを上手くカットした。そして、ボールは宮城のもとへ。宮城は圧巻のスピードでドリブル。コート上では、誰も追いつけない！

そして、レイアップシュートが決まった。

残り3秒で逆転に成功。そのまま、タイムアップ！
去年、準優勝の横田中に奇跡の勝利。

宮城は感謝していた。コートサイドにいた安西監督の言葉。
その後、いくつか強豪から誘われたが、安西のいる湘北を選んだ。

ついででやる（後書き）

今回は宮城リョータがスポットを当ててみました。
オヤジに憧れて湘北に入学していますが、理由が明かされていません。

きっと、ミシチーと同じような理由だと思います。

ちなみに、この試合は決勝のつもりで書いていません。
もし、決勝ならミシチー同様“MVP”になってしまうのです。
普通の公立校が2年連続で獲得するなんて、おいしいことないです
から。

要チェックや

「彦一、あんた本当に陵南高校に入るの？」

「ああ、そうや」

姉である相田弥生は、彦一の選択に疑問を持っていた。

「あんた陵南は神奈川の強豪よ。分かつてる？」

「分かつとは、そんなこと…」

彦一は強く答えた。しかし…。

「「めん、大声出して」

優しい性格からか、すぐに謝った。

「いやー、あんたは試合どころかベンチ入りも無理だと思つわ」「弥生は彦一に素直に思つていることを言つた。

「姉ちゃん、わいはベンチ入りできなくともいいんや

「何言つてるの?じや、何の為に?」

「仙道さんと一緒にバスケをやりたいんだ

彦一の表情を真剣だつた。

「でも、仙道くんがアンタを相手にすると思つづ。」

「別にされなくともかまへん。あの人のプレー見れるだけで十分」

仙道彰一 東京の公立中学出身

今年、陵南高校に入ったスーパールーキー。

身長が190センチを越え、さまざまなポジションをこなす。

また、1対1にめっぽう強く、点取り屋である。

練習試合とはいって、湘北戦で47点も取つた。

「仙道さんは、スター。それに必ず全国大会に行ける。そんな気になるんや」

彦一は弥生に対して、熱い思いで言った。

「そこまで言うなら、行きなさいよ。その代わり・・・」

「なんや?」

「仙道くんと話す機会作つてや」

「はつ。何言つとんのや、姉ちゃん」

「だつて、仙道くんてカッコイイでしょ。それにバスケも天才。独占で取材したいわ」

弥生は仙道がお気に入りなのだ。

「そんな姉ちゃん、ムチャクチャな」

「だから、彦一。アンタ努力しなさい」

「そう言われても、ワイには才能ないし」

「だつたら、こうするの?」

弥生は彦一に耳打ちした。

それから、彦一は合格し、晴れて“陵南高校”に入学した。

しかし、実力でベンチ入りすることは、かなり厳しい。

だから、彦一は姉に言われたとおり、県内すべての高校のデータを

田岡に渡した。

その中には、姉の弥生が集めたものも含まれている。

その結果、田岡は彦一をベンチ入りさせた。

彦一はスコアラー的な存在で入れたと思つてい。

おかげで間近で仙道のプレーを見ることができ、満足していた。

「彦一もアホや。私の策略にまんまとはめられた」

弥生は弟を上手く利用することに成功し、念願の「仙道独占取材」という目標を達成した。

しかし、田岡がベンチ入りさせたのは、もうひとつ理由があった。弥生も気づいていなかつたことがある。

本人の彦一でさえも気づいていないであろう。

田岡は、ある人物から“彦一が人一倍努力していること”を伝えられていた。

だから、スコアラー的な存在だけでなく、将来を見据えてベンチ入りさせた。

その助言をしたのは・・・他ならぬ、仙道彰だったのだ。

要チェックや（後書き）

今回は彦一について書きました。
ゴマすつて入ったんじゃないかと思つた人も多いはずです。
ですが、それだけだと彦一が悪者になってしまいます。
でも、スコアラー的な存在だけで、ベンチ入りできるはずがないで
すよね。
ということから、最後に仙道の助言で入ったという理由を作りまし
た。

「アンタ、それでもプロのライターなの？」
ドン。相田弥生が原稿用紙を机に叩きつけた。

「すいません」

「すいません、じゃないわ。アンタ、この仕事ナメてるでしょ？」

「いえ、そんなことは・・・」

「とにかく、書き直し。こんな記事載せられんわ」

弥生は、自分のデスクに戻つていった。

「あ～あ。またやつちやつたのかよ」

「そんなんじや・・・」

「そろそろヤバインじやない。素人じゃないんだし」

同僚の男は、首を切るポーズを取つた。言い返せなかつた。

「はあ、俺はやつぱりライターは向いてないな」
中村は一人、屋上でつぶやいていた。最近の日課になつていて。
原稿を書いても、ダメ出しの連発。たしかに、この仕事は楽だと思つて入社した。

しかし、現実は甘くなかった。先輩は関西弁といふこともあり、少し言葉がキツイ。

ちょっとしたことで、すぐに怒鳴つてくる。もちろん、自分にも非はあるのだが・・・

飲みかけの缶コーヒーをてすりに置いた。少しほーっとして、空を見上げた。

「あー、この先、どうしたらいいんだろう？」

時計を見たら、休憩時間が終わりになりかけていた。

「ヤバイ、早く戻らなきゃ」

駆け足で階段を降り、自分の席に戻った。

「編集長、ホンマですか？」

「ああ、本気だ」

「失礼ですが、中村くんで大丈夫ですか？」

「何を言つてるんだ。予選のときから、ずっと一緒にじゃないか」

「そうですが・・・彼の原稿は、完全な素人が書く文章ですよ」
編集長は腕組みをしながら、次の言葉を考えていた。

「たしかに、彼は入社して3ヶ月。完全に仕事をナメてる態度だったが、この3ヶ月で変わった」

「でも、文章が素人でも書けるレベルで」

「君は何も見てない。この文章を見てくれ」

編集長は原稿用紙を逆向きにして、弥生に見せた。

「湘北の注目は、背番号10番・赤い髪の桜木。彼はおそらく初心者。しかし、スーパーサイヤ人のような超人的な身体能力を随所で発揮。驚異的なジャンプ力でリバウンドを取り、相手のショートをブロック！フリースローは下から投げる。得点力はなく、ディフェンスも荒削りだ。デビューから5試合連続退場と大暴れしたが、成長が速い。湘北の秘密兵器にふさわしい人物だ」

「これは私がボツにした原稿です。こんなドラマ『ゴンポール』のような文章」

「たしかに文章がスマートじゃないし、ブツブツと切れている。でも、着眼点がいいじゃないか」

「といいますと」

「湘北は大黒柱・赤木のワンマンチームに新人王の流川が入ったチームという見方が強い。他社では、中学MVPの三井やガードの宮

城のことを書いていいると「さもあるが」

弥生は黙つて聞いていた。

「中村くんのいいところは、桜木君に注目していたところだ。私も気になっていたんだ。試合でけつこうヤンチャなことをしたそุดが、他社は取り上げていない。きっと得点が少ないから注目してないんだろう」「うう

「はつきり言って、彼はまだ素人だ。でも、素人だから、素人に着目することができたんじゃないか」

弥生は、はつとした。

「もう少し、中村君に期待してみてはどうだ。君だつて、陵南の記事を任せたけど、仙道君ばかりだぞ」

「はい、すみません」

「じゃあ、全国大会も中村君と一緒に頼んだぞ」

「分かりました」

弥生は一礼をしてから部屋を出た。

「はあ、ちょっとシヨツクやわ」

ポツリとつぶやいて、後ろを振り返ると・・・

「うわっ、アンタ何してん？」

「僕、編集長に認められたんですね」

「認められたって、アンタねえ」

「やつたー、これで一人前だ。これからは、もっと眞面目に・・・」

「アホんだら。アンタは素人」

「よーし、これからも頑張ろう」「うう

「はあ、ダメや。聞いてない」

中村は編集長の最後の言葉しか聞いてなかつた。だから、ベタ褒めされたと勘違いしていた。

『書く前に、人の話を聞け』と思う弥生であった。

素人ライター（後書き）

中村くんについて取り上げてみました。

なんとなく、だけど、フリーライターから中途採用されたって感じがしますよね。

まだまだ桜木と同じように素人です。

まさかの敗戦

ピッパー、体育館中にブザービートが鳴り響き、試合が終わった。そして、大きなどよめきが起きた。

「翔陽が負けた」

「去年2位の翔陽が湘北に負けた」

「番狂わせだ。神奈川4強の1角が崩れたぞ」

翔陽の選手は、立つたまま呆然としていた。

立ち上がり翔陽は、湘北を圧倒していた。

しかし、スーパーラーキー・流川の空中で2人を交わすダンクで、少しづつペースを握られた。

それでも、翔陽が前半をリードして折り返した。

後半、湘北がペースを握り、まさかの逆転。エース兼監督の藤真が自らコートへ。

見事に流れが変わり、15点近く差をつけた。

ここまでは予想通りといつより、湘北ができますとこいつ展開だった。

しかし、番狂わせが始まったのは、そのあとだった。

ここまで眠っていた三井が目を覚まし、スリーポイントを連発。桜木の効果的なリバウンドもあり、残り2分で再逆転。点を取り返すことができず、1ゴール差で負けてしまった。

「くそつ、桜木のやつ。あんなにすごい選手だとば」

「花形がくやしそうに言った。」

「あんな素人くさい奴なのに」

高野が言つた。ブロックされたことが屈辱だった。

「俺のせいだ」

「一志」

「俺が三井を止めていれば……」

「何言つてんだ。後半途中まで、あいつにほとんど仕事させなかつたじゃないか」

「やっぱり、俺はあいつを超えられないのか」

長谷川はタオルで顔を覆つた。

なんてデカイことを言つたんだね」

“5点以内”に抑える。そんなことを言つて、前半で5点取られていた。

また、三井にやられた。2年近くブランクのある人間にやられた。自分が成長したと思っていたが、思い違いだったんだ。

左の肩をポンと叩かれた。

「一志」

顔を見上げた。そこには涙だらけの藤真が立つっていた。

「今日のプレーは、最高だつた」

「いつたい何を言つてるんだ」

「一番最低だつたのは俺だ。湘北を甘く見ていた周りがシーンとしていた」

「違います。俺がもつとしつかりしていれば

「伊藤、まだ2年だ。仕方ない」

伊藤も悔しかつた。同じ学年の宮城リョータを止められなかつた。

「やつぱり、俺のせいだ」

「おい、一志。どこに行くんだ？」

長谷川は、ロッカーを飛び出した。

とりあえず、一人になれるところに行きたかった。
個室トイレに入った。

「くそー」

悔しさで何も考えられず、ぼーっとしていた。
中学時代、全く止められなかつた三井を止めることがだけを考えていた。

そのため、強豪の翔陽高校に入った。

しかし、1年の夏、不良になつた三井を見た。
目標としていた相手が、バスケをやめたことは悔しかつた。
でも、自分の性格上、ちょうど良かつたのかもしれない。
個人に走り過ぎるくせがあつたから、チームの勝ちだけに専念できる。

そして、レギュラーになることができた。

「くそー、あいつのこと思い出せないな」

「三井、そろそろ行こうぜ」

「どこの中学の奴だ。あんなに動きのいい奴忘れるわけねえ」

「ああ、地味ながら、いい動きをしていたよ」

「よく木暮で抑えられたよな」

「おい、俺だつてがんばってるんだぞ」

「三井・・・」

「ん？」

2人は振り返つた。

「おい、本当に中学時代、俺と対戦したのか？」

「ああ、たしかに」

「おーおー、もう試合が終わってるんだぞ」

険悪の空気になり、木暮はいつものよにソワソワしていた。

「中学時代の俺だったら、もっと取れたのにな

卷之三

「俺は中学の遺産でやっているようなもんだ。冬はもつと成長してるから覚悟してけよ」

三井はそう言い残して、その場を立ち去った。

「いた、一志、どこにいたんだよ。探したぞ」

「みんなおしゃべり

「冬は湘北を倒すぞ」

三

「そして、海南も倒して、冬こそナンハーワンになるんだ！」

パンシイ 藤原が要を口へる。

「ああ、そうだ。冬こそ翔陽がナンバーワンになる番だ」

引退を考えていた翔陽の3年生は、全員が残ることを決めた瞬間だった。

まわかの敗戦（後書き）

翔陽にスポットを当ててみました。
まさかの初戦敗退を喫したので、全員が残ったんだと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4555e/>

スラムダンク 短編集

2011年11月11日14時08分発行